

フィンランドの音楽教育 I

ー日本フィンランド学校での指導と フィンランドの小学校音楽科授業視察を事例としてー

田 原 昌 子

はじめに

近年、OECDによる生徒の学習到達度調査（PISA）¹⁾で「学力世界一」の国として、フィンランドの教育が世界的に注目を浴びている。例えばPISAの2003年の調査において、読解力及び科学的リテラシー1位、数学的リテラシー2位、問題解決能力3位、さらに2006年の調査においても、科学的リテラシー1位、読解及び数学的リテラシー2位と好成績をおさめている。この結果に、日本においてもフィンランドの教育が注目されはじめ、「フィンランド・メソッド」や「フィンランド方式」として、様々な著書でその教育方法が紹介されるようになった。また多くの日本の教育関係者がフィンランドの教育現場を視察し、その成功の要因を探ろうとしている。

福田誠治は、著書『格差をなくせば子どもの学力は伸びる 驚きのフィンランド教育』のなかで、日本の旧『教育基本法』²⁾とフィンランドの教育に共通する精神を見出し、次のように述べている。その精神とは「教育とは自ら考え、自ら探求し、自立する人間を育てる民主主義にある。自立する人間を育て、学びを支援する教育を平等に保障すべしということである。」³⁾ というものである。ではその共通の精神で進められ、「学力世界一」という結果を導くことができたフィンランドの教育と、現在の日本の教育とは一体何が違うのだろうか。両国の相違点あるいは共通点に、これから日本が進めていく教育の方向性への大きな示唆が含まれているのではないかと、フィンランドの教育と照らし合わせた日本の教育の見直しが進められている。

筆者はフィンランドの作曲家たちによるピアノ音楽の研究、日本フィンランド学校(JASUKO)⁴⁾での「音楽」や「日本語」の指導、そしてフィンランドの幼稚園・小学校・リズム教室視察などを通して、20数年間フィンランドとの繋がりを持ち続けている。特にJASUKOにおいて合奏指導に携わった際、ドラム・セットやベース・ギター、ロック音楽がフィンランドの小学校音楽科で取り入れられていることを知り、日本の小学校音楽科での指導内容に比べてなんと斬新なことかと、大きなショックを覚えた経験がある。

学習指導要領において示された指導目標・内容の下で、多くの場合、検定を受けた教科書を用い

て授業を進める日本の小学校音楽科教育と、フィンランドの小学校音楽科教育との相違点・共通点は何であろうか。フィンランドの音楽教育を考察することを通して、日本の子どもたちに、より豊かな音楽性を育む音楽教育を提供する「手がかり」が見えてくるのではないだろうか、と考える。

本報告ではフィンランドの教育を音楽教育の観点から考察する第一段階として、JASUKOで筆者が担当した合奏指導や、フィンランドの小学校音楽科の授業視察を通して見えてきた、フィンランドの小学校音楽科教育の特色を考察する。

I フィンランドの学校教育

フィンランドの教育制度(図1)は就学前教育に始まり、7歳からスタートする基礎学校(日本の義務教育に相当)の9年を終了した後、ほとんどの生徒は職業学校、あるいは普通科高校に進学し、その後、大学または高等職業専門学校へ進学する。また他に成人教育の機会が充実しており、市民大学や夏期大学、成人教育センターや成人職業教育センターで、いつでも学べるようになっている。

フィンランドには、「国家カリキュラム大綱」(ナショナル・コア・カリキュラム)という一種のガイドラインとなるものがあり、基礎学校9年間の授業時間数等について示されている。しかし実際には、科目の区切りやどの学年で何をどう学ぶかは地方自治体と学校で具体化されるので、変更が可能である。

何(教材)をどのように指導するか(指導法)は、各学校や各教師に任されており、権限と責任は全て学校に与えられている(図2)。言い換えれば、学校の数だけ、教師の数だけの教材・指導法が存在すると言える。また教科書検定制度はなく、どの教科書を採用するかは教師に委ねられ、その教科書は校長が承認して使うが、あくまで教材の中の一つに過ぎない。教師は教科書を始めとする様々な教材を選び、または自分で教材を作り、教師一人一人が研究を重ねて授業の準備をすることになる。

多くの学校では8月中旬から新学期が始まり、翌年の6月中旬で終わる2学期制をとっている。年間の授業日数は約190日、夏休みは6月中旬から8月中旬までの二ヶ月、その他に秋休暇、クリスマス休暇、スキー休暇、イースター休暇と、一週間から二週間の休暇がある。

フィンランドのほとんどの学校は公立で、基礎学校の間は文房具や給食費、通学費も無償である。一クラスは15人から20人程度の児童・生徒数(地域や授業の内容によっては、この半数になることもある)から成り、小規模校では複式学級で授業が進められることが多い。

では、何故このようなフィンランドがPISAで好成績をおさめたのだろうか。それを探る手がかりの一つとして、フィンランド国家教育委員会が出した公式説明を、福田誠治は著書『競争やめたら学力世界一 フィンランド教育の成功』⁵⁾の中で、以下の11項目にまとめている。

- ① 家庭、性、経済状態、母語に関係なく、教育への機会が平等であること。
- ② どの地域でも教育のアクセスが可能であること。
- ③ 性による分離を否定していること。
- ④ 全ての教育を無償にしていること。
- ⑤ 総合制で、選別をしない基礎教育。
- ⑥ 全体は中央で調整されるが実行は地域でなされるというように、教育行政が支援の立場に立ち、柔軟であること。
- ⑦ すべての教育段階で互いに影響し合い協同する活動を行うこと。仲間意識という考え。
- ⑧ 生徒の学習と福祉に対し、個人に合った支援をすること。
- ⑨ テストと序列づけをなくし、発達の視点に立った生徒評価をすること。
- ⑩ 高い専門性をもち、自分の考えで行動する教師。
- ⑪ 社会的な構成主義による学習という概念。

これら11項目に、フィンランドの学校教育の柱が集約していることが見て取れる。「教育」に投資をし、「人」を育てるという高い精神性に裏打ちされた行動が、北欧の小国が国際競争に向かう上での大きな原動力になっている。

II フィンランドの小学校音楽科教育現場

II-1 日本フィンランド学校（JASUKO）での合奏指導

筆者は2000年から2003年に亘り、JASUKOで合奏指導とピアノの個人指導をした経験を持っている。当時生徒数は激減し、基礎学校に当たる小学校部・中学校部を合わせて全校生徒が10人前後という少人数であった。

家族がJASUKOから離れた場所に住み通学が不可能な子どもたちや、フィンランド本国から派遣されている教師家族は、附属の寄宿舎で生活をし、JASUKOは一つの家族のような集団であった。教員は2人（ほかに教育実習生1人が補助として来日していた時期がある）で、授業はフィンランド語のみを用い、複式学級で進められていた。

当時、JASUKOには音楽科の授業で特に器楽に関する授業を指導できる教師がいないので、小学校2年生から中学校2年生という学年の広がりがある子どもたちの合奏指導と、小学生女子3人のピアノの個人指導とをやって欲しいという要請を、学校や父兄から筆者は受けた。

筆者がJASUKOにおいてどのような指導を展開したのか、その一例として合奏の指導方法と内容を以下に述べる。

まず、編成等を考慮に入れた演奏曲目を選択することから始めた。編成は中学校2年生男子2人、

小学校3年生男女4人、小学校2年生男子1人による計7人である。男子はドラム・セット、ギター、エレクトリック・ベースギターに興味が高く、中でも中学生はロック音楽をやりたいとの希望を持ち、女子はドラム・セットに興味はあるがメロディのきれいな柔らかい曲をやりたいと、それぞれにはっきりとした演奏したい曲に対する希望を持っていた。そこで筆者は7人全員に、次の3つの提案を示した。

- ①中学生が中心になり、JASUKOにある楽器を用い、皆で演奏できそうな音楽を選び、ギター、ベース・ギター、ドラム・セット、カンテレ⁶⁾、ピアノを入れて合奏する。
- ②小学生が学習経験の少ないギター、ベース・ギター、ドラム・セットの演奏は、中学生が小学生を指導して、全員が全ての楽器を拙くても演奏できるようにする。
- ③皆に馴染みがある曲やクリスマスの曲を取上げ、クリスマス会や終業式で成果を発表する。

子どもたちとの相談の結果、合奏曲は、フィンランドで流行している転調を含んだ短調のポピュラー音楽の曲を1曲、クリスマスにふさわしい賛美歌から1曲の計2曲を選択した。さらに合奏曲に加えて、中学生2人を含む男子4人はロック音楽のバンド演奏用曲を1曲、女子3人はピアノ連弾曲をそれぞれ選択した。

教師である筆者は、子どもたちが実際に曲に取り組むに当たり、ポピュラー音楽をJASUKOにある楽器を使用しての合奏曲にアレンジする際の音楽的な知識や技術を指導し、次の助言を与えた。

- ・自分たちが表現したいと考えている演奏により近づくためには、どのようなテクニックが必要か
- ・そのテクニックを獲得するためにはどのような練習したらよいのか

この助言を受け、子どもたちは互いに協力して練習を繰り返し、合奏やバンド演奏を自分たちの力で創りあげていった。

JASUKOの環境に関して付記しておきたいことがある。JASUKOの環境は、全児童・生徒の保護者が宣教師や教師で、音楽に特別に造詣が深い家庭環境で育った子どもたちの集団であり、子どもたちのほとんどが附属の寄宿舎で共に生活をし、合奏以外の時間も、上級生が下級生にギターやベース・ギター、ドラム・セットの演奏の手ほどきを熱心に行っていた。これらはフィンランド国内ではあまりない事例といえる。また合奏指導は日本のクラブ活動に相当すると考えられるので、授業としての一般的な音楽科教育とは異なる。

しかしJASUKOの教育方針が、日本の状況を踏まえながらも、あくまでもフィンランド国内の教育方針に従って授業を行うということや、毎週1回、筆者が数年に亘り継続的にJASUKOを訪問して子どもたちと関わり、フィンランドから送られて来る教科書や色々な楽譜を参考にして合奏指導をしたことを通して、フィンランドの子どもたちが、どのような教科教育としての音楽科教育を受けているかを実感として知ることができた。

II-2 フィンランド国内の小学校音楽科授業視察

JASUKOでの指導を機にフィンランドの音楽科教育に興味を持った筆者は、2回に亘ってフィンランド国内の小学校を視察した。詳しくは以下の通りである。

第1回目の訪問

訪問日時：2004年 5月24日

訪問場所：ユヴァスキュラ大学附属小学校音楽教室

フィンランドでユヴァスキュラ大学は教育研究で有名

対象学年：3年生・5年生各1クラスの授業（各クラス20人前後）

授業は音楽専科教師が担当

授業内容：年度末に近い時期で、両学年とも既習曲の復習とリズム学習の復習が中心の授業で、教科書は一切用いず、必要に応じて歌詞はOHPで映し出され、リズム学習では、給食で使ったヨーグルトのプラスチックの空容器を用いて指導がされた。

3年生・・既習の歌唱曲の復習にリズム学習を取り入れた表現学習

全員で指・手・足で、またはヨーグルトのカップを机上で打ち、色々なリズムと、強拍・弱拍の組み合わせから成る拍子の学習が進められていた。さらに歌唱指導の際、子どもたちは交代でドラム・セットを担当してビートを打ち、拍子打ちやリズム打ちの学習と歌唱学習を組み合わせた授業が展開されていた。

5年生・・既習の歌唱曲とリズム学習、器楽合奏を組み合わせた表現学習

3年生と同様に、指・手・足やヨーグルトのカップで色々なリズム学習をし、そのリズムを既習の歌曲に合わせ、さらにドラム・セット、ベース・ギター、伴奏に必要な和音の音だけを組み合わせた木琴を加え、子どもたちがそれぞれのパートを交代で受け持ち、リズム・歌唱・器楽のコンビネーションによる表現学習がされていた。

木琴を加えるに当たっては、伴奏に必要な和音（I・IV・Vの和音）の構成と和音の根音についての音楽理論の説明がされた後、和音の根音と第5音だけを用いた伴奏型を木琴で加え、合奏の学習がされていた。

第2回目の訪問

訪問日時：2007年 8月27日

訪問場所：ヴァンハンキュラン小学校教室・体育館

対象学年：2年生・4年生・6年生各1クラスの授業（各クラス16人～18人）

2年生のクラス担任が音楽を得意とするため、入り授業として4年生・6年生の音楽授業も担当

授業内容：新年度がスタートした2回目の授業で、視察した3つの学年全てで、前年度のリズム・拍子の学習の復習に重点が置かれていた。

2年生・・教室で手拍子・足拍子などの単純な身体活動を取り入れた歌唱学習（図3）

1年生で作った手作り楽器のマラカス（小さなジャムのビンの中にマカロニを入れ、蓋をして振るとマラカスのような音が出る）の、縦横どちらに振るかによって出来る音色の違いを拍の強弱や拍子の学習に利用し、歌に合わせて拍子を取る学習がされていた。また数曲の既習の歌曲をCD伴奏で歌いながら、リズムに合わせて手や足の動きを加えた身体表現の学習がされていた。

4年生・・体育館で、歌唱に合わせてドレミパイプ⁷⁾を伴奏楽器として使用し、和音の響きやリズムの学習を、またボディパーカッションを使って音楽のリズムや拍子を、身体を通して感じる学習（図4）

2年生に比べ、リズムや拍の流れを感じるための身体表現がより広範囲で複雑になっている。さらにドレミパイプを導入することによって、音の重なりや和音の響きの要素がプラスされた学習がされていた。これらの要素に、速度・強弱の変化を加え、音楽を形づくっている要素を複数組み合わせることによって生じる多彩な表現や、その面白さを感じとることが出来るような、また単調な表現が反復されることのないような指導の工夫が見られた。

6年生・・体育館の中でダンスを通して音楽の様々な要素を感じ、それを表現する学習（図5）

クラス全員で輪になって音楽に合わせて踊ったり、ステップを踏みながら歌ったり、またはボディパーカッションを入れるなどして、ダンスを通した音楽のフレーズや拍の流れを感じる学習がされていた。ダンス音楽の具体的なリズムや拍子は、ボンゴに見立てたポリバケツを叩いて確認したり(図6)、踊りのステップのテンポを落としてステップを確実なものにしたりと、色々な方法で指導が行われており、音楽の様々な要素をダンスという身体表現を通して感じ、体現する学習が展開されていた。

Ⅲ 指導・視察を通してみたフィンランドの小学校音楽科教育の特色

何（教材）をどのように指導するか（指導法）は、各学校、各教師にまかされており、権限と責任は全て学校に与えられているフィンランドでは、各教科教育において教師の数だけの指導の内容（教材やその取上げ方）、指導法があるといわれ、音楽科教育においても然りである。アプローチはそれぞれ異なっても、「人を育てる」という大きな目的は全ての学校・教師に共通であり、それが各々の指導法や内容の特色として反映されているのではないだろうか。

JASUKOの合奏指導で子どもたちとの関わりや、2回に亘って訪問した2つの異なる小学校の音楽科授業視察で得た指導内容・指導法から、フィンランドの小学校音楽科教育の特色が浮かび上がってきた。その特色は、換言すれば日本の小学校音楽科教育との相違点とも言える。

Ⅲ—1 日本フィンランド学校（JASUKO）での指導事例から

JASUKOでの指導から、フィンランドと日本の子どもたちとの間で、興味を持つ音楽や楽器について大きな違いがあることが見えてきた。これらの違いは音楽科教育における音楽を特徴づける要素としての「調」の扱いと、取り扱う「音楽のジャンルの違い」により生じていると言えよう。この2つについて考察を行う。

① 音楽を特徴づける要素としての「調」の扱い

一般的に幼稚園から小学校中学年位にかけての日本の子どもたちは、‘元気な・明るい’感じの長調の曲に強い興味を示す傾向があり、日本の音楽科教科書で取上げられる楽曲は長調の曲が断然多い。音楽にはその国や地域の自然・歴史・文化が背景にあり、音色や和音、拍子やリズムといった音楽を特徴づける要素に反映される。それ故フィンランド民謡には北欧の長く厳しい冬を背景にした短調の曲が多く、子どもたちの歌にも日本に比べて短調のものが多く。またフィンランドの子どもたちは、子どもたちの持つ‘物静かな・暗い’情緒と響き合う短調への興味も強いと考えられる。その結果、合奏曲を選択する際、JASUKOの子どもたちは基調が短調で長調への転調が見られる曲を選択したと考えられる。

② 取り扱う「音楽」の範疇

合奏曲の担当楽器を決定する際、子どもたち全員がドラム・セットやギターの演奏に強い興味を持っていた。その理由として、フィンランドの音楽科教科書⁸⁾ 中学年用で、日本の小学校音楽科教科書には取上げられていないドラム・セットやギター、ベース・ギターの奏法が、高学年用でバンド演奏が取上げられていることが考えられる。

また、日本の小学校音楽科で伝統楽器に関して和太鼓が取上げられるように、フィンランドでは伝統楽器のカンテレが取上げられ、両国において小学校音楽科教育として伝統音楽の取上げは共通している。日本の学校教育の場においてもクラシック音楽や伝統音楽だけでなく、ポピュラー音楽が小学校音楽科で取上げられるようになってきた。しかしフィンランドでは、取上げられる音楽のジャンルがより多岐に亘っており、ゴスペルソングやフォークソング、ロック音楽なども含み、若者が興味を持つバンド演奏を学校教育の中で学ぶ機会が用意されている。このように、フィンランドでは様々なジャンルの音楽学習を早期から取り入れ、フィンランドの若者が強い興味を持っている音楽を含めた広い範疇での音楽学習がされている。これらが音楽及び楽器への強い興味を育む豊かな土壌になっていると考えられる。

以上の①・②の考察から、フィンランドの音楽教育は自然・歴史・文化を背景に持つフィンランド特有の音楽を立脚点に、幅広いジャンルの音楽を小学校音楽科教育の段階から取上げることで、

子どもたちの自発的な興味を導きだしているといえる。

Ⅲ—2 視察した2つの小学校の事例から

訪問した2つの小学校は立地・規模・施設といった状況、視察した学年・時期、各授業の内容・教師の指導法が異なるが、両校の指導の共通点として、「リズム教育の重視」と「ヨーロッパやアメリカの様々な教育法を取り入れた指導」の2点が挙げられる。

この2点を考察することで、フィンランドと日本における音楽科教育の相違点や共通点を明確にし、フィンランドの小学校音楽科教育の特色を挙げたい。

① リズム教育の重視

両小学校の給食で出てきたヨーグルトカップやヨーグルトのポリバケツ容器といった身近なものを使って、またはボディパーカッションや指・手・足の身体表現を使ってのリズム・拍子の指導に力が注がれていた。特にヴァンハンキュラン小学校では高学年の授業でダンスを取り入れ、そのステップを通してリズムや拍を学習する指導が進められていた。

視察したこの2校が共通して拍子やリズムの学習に力を入れていたことは、単なる偶然とは考えられない。身体を使って学習することは日本の音楽科教育でも取上げられる頻度が高く、子どもたちが楽しみながら学習でき、身体で音楽を感じることができる指導が行われている点において両国の音楽科教育と共通している。しかし、クラシック音楽や伝統音楽、ゴスペルソングやフォークソング、ロック音楽などの幅広い音楽に親しみ、小学校の学校教育でドラムを叩いたり、ベース・ギターを演奏したりする機会があるフィンランドでは、子どもたち全員が平等に体験できるという視点から身近にある物を利用したり、自分の身体を通して体験したりできるリズム学習が重視されているのではないかと考えられる。

さらにリズム学習は、和音の響きやフレーズといった他の音楽的な要素の学習に結びつけて展開され、音楽活動の基本的な能力を育て、またダンスという身体表現活動の体育科と結びつく点から、他教科との関連を図って学習を展開することができる点においても有効な学習として捉えられている。

② ヨーロッパやアメリカの様々な教育法の導入

* ダルクローズ⁹⁾ のリトミック

両校で見られたリズム教育を身体の動きと結びつけてリズムを感じ取るという指導は、子どもの特性を生かしているだけでなく、ダルクローズのリトミックの「音楽を特徴づける重要な要素であるリズムを身体表現で感じる」という理論を導入したものであると考えられる。またこの理論は、フィンランドの学校教育で取上げる機会があるドラム・セットの演奏やロック演奏に応用することができるので、リズムを重視したリトミックが導入されたのであろう。

***オルフ¹⁰⁾の持続低音や一定の音型を反復するオスティナート¹¹⁾の技法**

ユヴァスキュラ大学附属小学校 5年生のリズム＋歌唱＋器楽合奏による表現学習において、伴奏に必要な和音の音だけを組み合わせた木琴が導入されていた。この授業ではオルフの「全ての子どもが音楽できるように」という教育理論に基づき、まず全員で歌いながらヨーグルトカップを用いたリズム学習を行い、次にテクニックの有無に関係がないように、必要な音だけの音板が用意された木琴を加えた合奏が行われていた。さらにはドラム・セットやベース・ギターを加えた合奏でのリズム学習が進められ、器楽の伴奏音型にはオスティナートの技法が用いられていた。この歌と器楽、リズムとメロディ、器楽合奏の学習方法は教材としての教科書でも取上げられており、オルフの「全ての子どもが音楽できるように」という音楽教育理論が、「平等」が一つの柱であるフィンランドの教育に合致すると考えられる。

***ドレミパイプの導入**

ヴァンハンキュラン小学校では、4年生のリズム学習の中でドレミパイプがとりあげられていたが、その使用方法についてはオルフの木琴の使用法と同じように、数あるパイプの中から歌の伴奏に必要な音のパイプだけを使い、木琴よりさらにテクニックの有無を問わないパイプを叩いて音を出す奏法で、歌の伴奏のリズムをとっていた。

ドレミパイプは、ドー赤、レー橙、ミー黄、ファー黄緑、ソー緑、ラー紫、シーピンクと各音によってパイプの色が異なり、音の高さはそのパイプの長さによって生じ、見るからにカラフルで子どもたちの興味を惹きつけ、音楽科教科書にも取上げられている。リズムを叩く場合、持続低音やオスティナートの技法で伴奏をする場合、またパイプの組み合わせで和音伴奏をする場合等と、様々な場面で活用でき、どの子どもにとっても扱いが楽である。これらの理由でドレミパイプが小学校音楽科の学習に導入されたと考えられる。

視察した2校にみられる①、②の共通点は、個々の先生方が独自の工夫を凝らして進めている指導内容と指導方法である。だが実は、フィンランドの教科書の中で全て扱われている内容・方法である。日本の小学校音楽科教育の実践現場においても、個々の先生方の授業工夫として、同様の指導内容や方法が取上げられていると思われる。またリズムに重点を置く指導や、リトミックの指導法と考えられる内容が、日本の音楽科教科書で扱われていないわけではない。しかしフィンランドで見られたような、リズムを有機的にメロディやハーモニーに結びつける段階には至っていないと感じられる。一方、フィンランドにおけるリズム指導の重視は、子どもたちが自由に幅広いジャンルの音楽に触れる機会を拡大させ、リトミックだけに偏らず様々な音楽教育方法を取り入れることにより、全ての子どもにとって平等に音楽ができる機会を提供し、子どもたちの興味に広がりを与えている。これらフィンランドの小学校音楽科教育の特色は音楽教育に限らず、福田が捉える「一人ひ

とりを大切にする平等な教育」¹²⁾ という、フィンランドの教育の特長に通じるものであるといえる。

おわりに

この報告は、フィンランドの音楽教育を通して日本の音楽教育を考えてみるという、大きな目標のスタートラインに立ったにすぎない。本報告では、筆者が指導者であるという立場や、視察者であるという立場から把握した、フィンランドの小学校音楽科教育の特色を3つ挙げた。それは「幅広いジャンルの音楽を取上げ」、「リズム教育を重視」し、「ヨーロッパやアメリカの様々な音楽教育法を取り入れた指導」である。しかしその分析は、音楽の内容であったり指導法であったりと、多様な要素が混在した視点からなされ、その本質を見極めるに至っていない。さらに後者2つの特色については、違った時期に2校を視察しただけというサンプル数の不足から、総括的な特色として挙げることは難しいかもしれない。しかしながらこれらの特色には、個を大切にしながら多様性を受け入れるという、人間としての在り方までもが含まれているように思われる。

今後、フィンランドの小学校音楽科教育の教材分析という観点から、フィンランドの小学校音楽科教育の特色に関する考察を更に進め、フィンランドの小学校音楽科教育の目標を見出していきたい。

注

1) PISA (Program for International Student Assessment)

経済協力開発機構 (OECD) が実施している国際学力調査。2000年から3年に1度、加盟国の15歳の生徒を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決能力のリテラシーについて実施されている。

2) ここでいう(旧)教育基本法とは、1947年に制定されたもので、現行の教育基本法は、2006年に全部を改正し公布・施行された。

3) 福田誠治『格差をなくせば子どもの学力は伸びる 驚きのフィンランド教育』 亜紀書房 2008 p.263

4) JAPANIN SUOMALAINEN KOULU (フィンランド語による日本フィンランド学校、頭文字をとってJASUKO 通称ヤスコ)は、滋賀県大津市にあった日本在住のフィンランド人師弟のために創設された、9年制の私立の義務教育機関。4つの宣教団体によって1964年に運営がスタートし、遠隔地からの児童・生徒を受け入れるために宿泊施設が附属されていた。授業はフィンランド語で、フィンランドの教育方針に従って行われたが、2003年の夏、生徒数の減少のため活動が休止された。

5) 福田誠治『競争やめたら学力世界一 フィンランド教育の成功』 朝日新聞社 2008 pp.64-65

6) フィンランドの民族楽器。オリジナルは、ツィター属の5弦からなる発弦楽器である。音楽の多様性に合わせ弦の数が増え、現代では39弦のコンサート用カンテレもある。5弦のカンテレは比較的奏法が簡単のため、小学校低学年の教科書で取上げられている。

7) ドレミパイプ/Boom Whackersは米国のWhacky Music, Inc. のTuned Percussion Tubeのことで、叩いて音を出す楽器。ドレミファソラシドの音高によって色と長さが異なるプラスチックのチューブのこと。(図4の中で床の上に置かれているチューブ。)

8) OTAVA社 『MUSIIKIN mestarit 1-2』(低学年用)、『MUSIIKIN mestarit 3-4』(中学年用)、『MUSIIKIN mestarit 5-6』(高学年用) 2000年 2001年出版分の教科書を参考にして、合奏指導を行った。

9) ジャック・ダルクローズ 1865-1950 スイスの音楽教育者。音楽のリズムの要素と運動感覚を結びつけたリト

ミックスを考案している。

10)カール・オルフ 1895-1982 ドイツの作曲家・音楽教育者。彼の教育方法は教材集『こどものための音楽』で、まずリズム、それにメロディが付与され、ハーモニーは調性感として意味は薄く、合成音として扱うという基本的な考えが表されている。

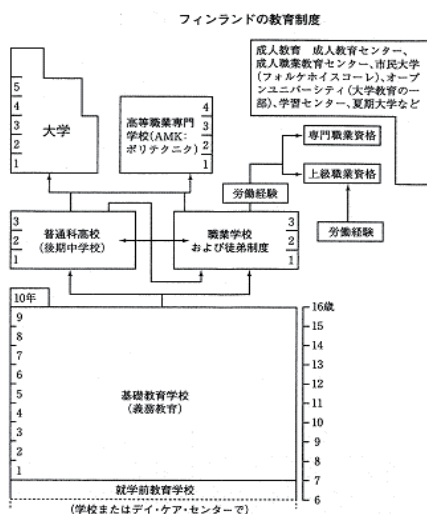
11)一定の音型を何回も続けて反復する作曲技法の一つ

12)福田誠治『子どもたちに「未来の学力」を』 東海教育研究所 2008 pp.76-77

引用・参考文献・参考図

- ・ 福田誠治『格差をなくせば子どもの学力は伸びる 驚きのフィンランド教育』亜紀書房 2008
- ・ 福田誠治『競争をやめたら学力世界一 フィンランド教育の成功』朝日新聞社 2008
- ・ 福田誠治『競争しても学力行き止まり イギリス教育の失敗とフィンランドの成功』朝日新聞社 2008
- ・ 福田誠治『子どもたちに「未来の学力」を』東海教育研究所 2008
- ・ リッカ・パッカラ『フィンランドの教育力—なぜ、PISAで学力世界一になったのか』学研新書 2008
- ・ R.ヤック-シーヴォネン・H.ニエミ編『フィンランドの先生 学力世界一のひみつ』桜井書店 2008
- ・ 増田ユリヤ『教育立国フィンランド流 教師の育て方』岩波書店 2008
- ・ 諸葛正弥『フィンランドメソッド 実践ドリル』株式会社毎日コミュニケーションズ 2008
- ・ 田中博之『フィンランド・メソッドの学力革命 その秘訣を授業に生かす30の方法』明治図書 2008
- ・ ヘイッキ・マイパー『平等社会フィンランドが育む未来型学力』明石書店 2007
- ・ オッリペッカ・ヘイノネン・佐藤学『NHK未来への提言 「学力世界一」がもたらすもの』日本放送出版協会 2007
- ・ 庄井良信・中嶋博編著『フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店 2005
- ・ OTAVA『MUSIKIN mestarit 1-2』『MUSIKIN mestarit 3-4』『MUSIKIN mestarit 5-6』2005
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 2008
- ・ 初等科音楽教育研究会編『最新 初等科音楽教育法 小学校教員養成課程用』音楽之友社 2009

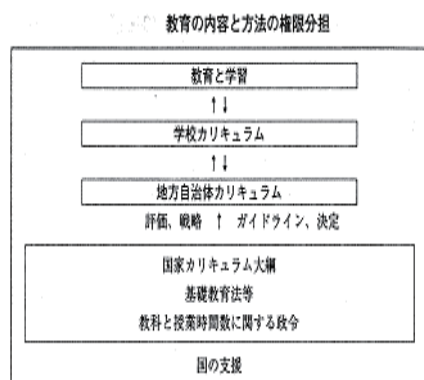
図 1



* Finnish National Board of Education, National Core Curriculum for Basic Education 2004. Vammalan Kirjapaino Oy, Vammala, 2004. を修正。
* フィンランドの教育制度はいろんなルートがあり、いつでも学べるようになっている。

出典：福田『競争をやめたら学力世界一
フィンランド教育の成功』p.68

図 2



* Irmeli Halinen, The Finnish Curriculum Development Processes. (第1回 PISA セミナー配布資料)
* 教育と学習を学校・自治体・国が支える。最上位に「学習」がある。

出典：福田『競争をやめたら学力世界一
フィンランド教育の成功』p.90

図3 ヴァンハンキュラン小学校

2年生の音楽授業風景



手でリズムをとりながら歌っている

図4 ヴァンハンキュラン小学校

4年生の音楽授業風景



ボディパーカッションでリズムをとりながら歌っている

図5 ヴァンハンキュラン小学校

6年生の音楽授業風景



音楽のリズムに合わせてダンスのステップを踏んでいる

図6 ヴァンハンキュラン小学校

6年生の音楽授業風景



難しいリズムを、給食に出たヨーグルトのポリバケツ容器を叩いて確認している